奈良・平城京跡(1)

1 所在地 一 奈良市四条大路一丁目、二・三 同大森町

2

調査期間

五年一一月~二〇〇六年三月、三 二〇〇七年一一 二〇〇六年(平18)五月~六月、二 二〇〇

月~三月

4 調査担当者 一 武田和哉、二

宮﨑正裕

山前智敬

3

発掘機関

奈良市教育委員会

5 遺跡の種類 都城跡 三 原田憲二郎・久保清子

遺跡の年代

奈良時代、二

弥生時代・奈良時代・平安時

で概要でである。でである。でである。でである。でである。でである。でである。でである。でである。でのできる。でのできる。</

○五・○六年度に平城京跡 は において実施し、木簡が出 は て報告する。

奈良市教育委員会が二〇

左京四条二坊三坪(市五五〇次調査)

立柱建物、掘立柱塀、井戸などを検出している。りやや東寄りの場所に位置する。調査地の西隣では一九九五年度に別をや東寄りの場所に位置する。調査地の西隣では一九九五年度に調査地は、平城京の条坊復元では左京四条二坊三坪南辺の中央よ

のうち釈読できない削屑を除く一○点を紹介する。簡は、奈良時代の河川○三から一六点出土した。ここでは、それら安時代にかけての掘立柱建物・塀、鎌倉時代の井戸などがある。木検出遺構には、古墳時代の溝、奈良時代の河川、奈良時代から平

砂礫が主体であり、中層は自然に堆積した粘土、上層は人為的に埋区北辺付近で約二mである。埋土は概ね三層に大別される。下層は認したのみで、東側・北側と南側は発掘区外へと続く。深さは発掘河川○三は、発掘区の中央から東側の部分で検出した。西肩を確

二棟と掘立柱塀一条の柱穴が掘り込まれている。 で、一部が埋没した後に、人為的に埋め立てを行ない宅地造成したい、一部が埋没した後に、人為的に埋め立てを行ない宅地造成したに、一部が埋没した後に、人為的に埋め立てを行ない宅地造成したい。堆積層の様相や遺のがとみられる堆積となっている。木簡は、下層から奈良時代前半めたとみられる堆積となっている。木簡は、下層から奈良時代前半

い事例と言えるであろう。 している様相は、平城京内の宅地利用の実態を考える上では興味深定される。河川を人為的に埋め立てて造成した後に建物などを建築の北または北北西方向から南または南南東方向へと流れていたと想の北または北北西方向から南または南南東方向へと流れていたと想

一 左京五条四坊九・十六坪(市五四一次調査)

灰色粘砂上面で行なった。期頃に埋没する流路の灰茶色砂・粗砂上面で、それ以外の箇所は黄丸坪の東端中央にあたる。遺構検出は、発掘区東端では弥生時代後れ坪の東端中央にあたる。遺構検出は、発掘区東端では弥生時代後

の河川を検出した。

物・塀、井戸、土坑がある。 る築地の雨落溝、九坪の坪内を区画する奈良時代の溝、掘立柱建 が間の東四坊坊間東小路とその両側溝、九坪の東と十六坪の西を限 主な検出遺構には、弥生時代後期の土坑、奈良時代の九坪・十六

木簡は、十六坪内の井戸SE○一の枠内から一点出土した。SE

○一は、掘形が南北一・六m東西一・七mの隅丸方形で、深さがの一は、掘形が南北一・六m東西一・七mの隅丸方形で、底にしままで、高さ○・九m分が遺存する。曲物の内法は、直径○・一大四mである。井戸側は一木を半截して刳り貫いたもので、底に一・四mである。井戸側は一木を半截して刳り貫いたもので、底に一・四mである。井戸側は一木を半截して刳り貫いたもので、底に

左京五条四坊十六坪(市五六八次調査)

坑、木橋がある。なお、発掘区北端では東から西へ流れる縄文時代攻内を区画する道路・掘立柱塀・溝、十六坪南面に開く門、溝、土溝、十五坪の北面を限る築地塀とその雨落溝、十六坪南限となる溝、のである。奈良時代以降のものには五条条間北小路とその南北両側のである。奈良時代以降のものには五条条間北小路とその南北両側調査地は、平城京の条坊復元では左京五条四坊十六坪の南端中央、

土した。後者は江戸時代初頭の土器とともに出土している。後に重複する位置で掘削された土坑SK〇八から一点、計二点が出水簡は、五条条間北小路北側溝の埋土から一点、この北側溝埋没

・ 木簡の釈文・内容

一 左京四条二坊三坪(市五五〇次調査)

						(7)		(6)	(5)		(4)	(5	3)		(2)			(1)
	九人廿六			· 		- 匱石□ 合			□□命者□受□□		・「<生石五斗	・「く安芸国	一君北」(オロ	「幣犬一分		•		•	・衛士十七人
		サ 六 				合合 ココココ四石二十]]]]]]坐	\\ \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\			・「く安芸国高田郡三田里己西マ首く」	Ę		従□位下□□	従六位上守左大史			八二五升
	$\int (256) \times 41 \times 3 019$				(薄い墨痕多数アリ)		$(258) \times (26) \times 8 081$		$(124)\times(10)\times3$ 081		V		X(100/~]出10 001 *	星(160)~3×10 061*	$(145) \times (5) \times 5 081$		$(141)\times(13)\times6$ 081		
辺割れ。	と右辺は削り。	端と左右	目の旁は	可能性が	二文字目	(6) は文書	「三田里	部を欠く	四周削り	その場合	いもう一	口に墨書	片。左大	簡 か。 (2)	⁽¹⁾ は 上		(10)	(9)	(8)
(9)は米の数量		両辺は削り。	「青」で、「連	可能性がある。⑥は上端と右辺削り	は「使」また	(6)は文書木簡の断片か。(5)は上端折	「三田里」は『和名抄』に見える安	部を欠く。里制下 (七〇一~七一七)	四周削り。左辺は、上部の切り込み	その場合国名を省略して郡名から書	いもう一方の木口に郡名の二文字が	口に墨書がある。他端は折れて欠損	片。左大史は太政官の官人で正六位	簡か。②は上下両端折れ、左右両辺:	①は上下両端折れ、左右両辺割れ		伊	□米一石一	
を記す帳簿木笠	下端は右辺から削っ	三片接続。右四	明」などの可能	端と右辺削り。	は「便」、五立	。(5)は上端折り	』に見える安芸			て郡名から書き	名の二文字が	は折れて欠損。	官人で正六位-	れ、左右両辺切	左右両辺割れ。				
簡の削屑か。い	て羽子板の柄は	辺は大きく欠点	胚性がある。(7)	下端折れ、大	文字目は 「預」	れ、下端削り。	芸国高田郡三日	の安芸国の白坐	より上の部分と	き出している」	書かれていた可	、某郡の書状の	上相当。(3)は梼	割れ。端正な立	。衛士への食料				
辺割れ。⑨は米の数量を記す帳簿木簡の削屑か。⑽は一文字のみが	て羽子板の柄状に削り出す。左	端と左右両辺は削り。三片接続。右辺は大きく欠損する。(8)は上端	目の旁は「青」で、「請」などの可能性がある。⑦は上端折れ、下	。下端折れ、左辺割れ。一文字	二文字目は「使」または「便」、五文字目は「預」または「頂」の	左右両辺割れ。	芸国高田郡三田郷にあたる。(5)	の安芸国の白米の荷札であろう。	より上の部分と中央下寄りの一	き出していることになる。(4)は	書かれていた可能性が考えられ	某郡の書状の軸か。現存しな	上相当。③は棒軸の断片で、木	割れ。端正な文字で書かれた断	衛士への食料支給に関わる木		,	0	(187)×(13)×5 081
カシ	上	놰	Γ	子	(1)	Ĭ	(5)	つ。	_	ば	TL.	ふ	\wedge	还厂	\wedge		091	091	31

残り判読できる。

向 司が候補として挙げられようが、出土地の左京四条二坊の東半は、 想定される。出土地が左京である点を考慮すれば、 分の断片(2)、 は、木簡の廃棄時期を考察する上ではひとつの手掛かりである。 ある可能性も充分考えられるので、廃棄元の特定は困難であろう。 調査所見から想定される河川〇三の上流部分は、 奈良時代後半における藤原仲麻呂の田村第推定地である。さらに、 みて、まずは官司との関連性、次いで貴族の邸宅との関連性なども の棒軸の断片(3)は他に例を見ない。これらの木簡は、 の範囲を逸脱している。中でも公文書進送の作法に基づく某郡書状 なお、 今回出土した木簡には、衛士の勤務を示す(1)、 すなわち平城宮の東南部であり、この付近より流出した木簡で 河川〇三が奈良時代のある時期に埋め立てられている事実 租税の荷札(4などが含まれ、 通常の宅地に関わる遺物 官人の位署書き部 調査地の北北西方 左京職などの官 その内容から

(1)

障障 障障障障心 履榎成成成 成 成机机机机机

径186×厚4

061

方々のご教示を得た。

武田和哉・原田香織、

宮﨑正裕、

三

原田憲一

郎

なお、

木簡の釈読にあたっては、

奈良文化財研究所史料研究室の

左京五条四坊九・十六坪

(市五四一次調査

と思われる。右断片の一・二文字目は「榎」の可能性がある。また、 側が欠損し、上端と下端に弧の形状をとどめる。 弧の形状をとどめる。右端近くに穿孔が一つある。 片で、右断片は左側が欠損し、上端から右端・下端にかけて曲物 表面は割りのままで、右辺は薄くなって終わる。 には元の材の削り調整、 右断片の一行目末尾の文字と左断片の最終行の一・二文字目は 「行」の旁「亍」と考えられる。 \equiv 両断片の間には、右断片の文字の左半と次の一行分の欠損がある 曲物の蓋板に習書したものである。蓋板は接続しない左右の二断 ①は厚みのある材を割り裂いて薄板状にしたもので、上端と左辺 (2)土坑SK〇八 (1)五条条間北小路北側溝 左京五条四坊十六坪 下端には二次的な切断面が残る。 (市五六八次調査 左断片は左右両 $92 \times (24) \times 3 \quad 081$ $153 \times 23 \times 3 \quad 065$ 表裏とも 10

2006年出土の木簡

